日本大学 桜樹会会報

第 3 号

昭和46年1月

日 本 大 学 桜 樹 会

目　　次

体操地図の座標　浜田靖一 …… 2
監督就任あいさつ　遠藤幸雄 …… 3
岩手国体に寄せて　門脇春男 …… 3
全日本インカレ成績 …… 5
インカレを振り返って　海谷美代子 …… 5
全日本選手権成績 …… 7
全日本選手権報告　菊地君男 …… 7
訃　報 …… 8
第4回ハゼ釣り大会報告 …… 9
第7回忘年会報告 …… 9
第1回桜樹スキースクール報告 …… 10
会費領収について　総　務 …… 12
お知らせ …… 12
結婚・誕生 …… 13
編集後記 …… 13

体操地図の座標

浜　田　靖　一

あさ，車の中でラジオを聞いていたら，アナウンサーが本日の格言というので「自然はとゞまることを知らない。とゞまることに対し自然はこれを罰する。ゲーテ」というようなことを言っている。私は運転しながら，オヤ面白い言葉だ，暗記してやろうと思って，いそいで口の中で繰り返しているうちに，だんだん自信がなくなってきて，結局学校に辿りつくころには全くウヤムヤなわけのわからない言葉になってしまった。若いころから，そう暗記力が強くなかった上に老化現象も手つだっての事だから仕方がないと思ったが，どうもこの言葉のもつ意味にはひかれるものがあった。そこで意を決して，その日のひるやすみに，ドイツ文学の大家である菊地先生を学部長室に訪ねて，こういう意味の格言がゲーテの言葉の中にあるかどうかうかゞってみた。菊地学部長は「あると思う，しらべてみよう」というご返事だった。そして二，三日後に私は学部長室で，車の中で逃がしたゲーテの言葉に再会することが出来たのである。菊地先生は貴方が車の中でお聞きになったのはおそらくこの言葉であろうといって，次の言葉を書いて下さった。

自然は永劫に変化する

自然の中には，一瞬の休止もない

自然は休止という言葉を知らない

止まることに自然は呪いをかけている

ゲーテ

たしかにこの自然の絶えざる変化こそ，又とゞまることを知らざる自然こそこの宇宙の鉄則であろう。

扨て，世界の体操競技の地図も，つねに親しい色に塗りかえられつゝ焦点が移っている。戦前，体操競技の本場はドイツであり，スイスやイタリアあたりからも，名選手が世界の体操界に絢爛たる名をつらねていたものである。

戦後はソ連から日本に，女子は依然ソ連が強く，東独やチェコ等も著しい進境にあるのが現状といえよう。

ひるがえって国内に目をむけても，その体操地図が，やはりいろいろな模様に絶えず塗りかえられつゝあることはいうまでもない。

問題は一体この地図は誰が塗りかえるかということだ。又その塗りかえられる原因は何かということである。絶えず鮮明な色でかゞやくために，お互いに何をしなければならぬかを年頭に考えようではないか。

1971. 1.

監督就任あいさつ

遠　藤　幸　雄

この度，日本大学体操部の監督という大任を，門脇前監督より引き継ぐことになりました。

引き継ぎから今日まで，短期間とはいうものゝ，その任務の多忙さ，難しさに驚ろいている次第です。

ご承知の通り，日本大学体操部は，門脇前監督の熱意により，十数年前創立され，急激な勢をもって成長してまいりました。従ってそれを更に助長することが，わたくしに与えられた使命と思います。

今後の抱負としては，勝負の世界に生きる以上，勝つことを前提条件として努力すべく考えております。もし，サイが負けにふられたとしても，その時はくやしい気持をもち，加えて今度こそはという次への発展性を含んでいてほしいものです。

いまひとつは，志を体操の技ひとつにする部員間に和を欠かせないということです。そのためには，横のつながり，縦のつながりを密にする必要があるでしょう。さらには，諸先輩との交流など，幅ひろい人間性を作るためにも大切なものと思います。

日を重ねるにしたがい，いろいろな問題が提起され，わたくしの目標も具体化されることゝ思います。

今後，浜田部長，門脇副部長，早田，木村両コーチの，良きアドバイスを存分に吸収しながら，体操部の大いなる発展に努力を惜しまないものです。

どうぞ諸先輩のみなさん，以前にもまして変らぬご指導ご鞭韃を下さいますよう，またいつわらぬご意見を賜りますようお願い申し上げます。　　1970. 10. 9

岩手国体に寄せて

門　脇　春　男

桜樹会報３号の原稿依頼にこたえて，国体のために盛岡に集った全国各地の若きＯＢ諸姉諸兄と，現役学生の懇親会を催した際の，いろいろな話題にふれてみたい。

とき　昭和４５年１０月１３日（火）
午後６時～８時

ところ　盛岡市内城跡
お濠のそばの赤い鳥居の近くの古い一杯のみやの二階

世話をしてくれた人　川部先輩

参加者　浜田部長，門脇春男

〔OB〕

藤谷弘一(北海道)　中島　元(北海道)

堀田敏明(長崎)　山本好隆(神奈川)

原　弘吉(神奈川)　門脇　隆(岩手)

川部力夫(岩手)

〔学生〕

赤嶺芳弘(沖縄)　佐藤　均(秋田)

住広　晃(広島)　島崎康行(大阪)

伊藤　繁(大阪)　宮川早苗(福井)

矢部信恵(福井)　宮川聖子(兵庫)

渡辺富代(北海道)　村上吉正(岩手)

河内芳子(香川)

〔視察員〕

石井悦夫　田中千文

宮沢多恵子

当日欠席した人

〔OB〕

松重道子(山口)　浦辺由子(神奈川)

斉藤正弘(秋田)

〔学生〕

中村栄喜(秋田)

みちのくの盛岡に集った役員，選手諸君をお招きして懇親会を開催したところ，ほとんどの人達が集った。

暖い鍋料理に，おいしい地酒，そして新旧のOB，学生，久しぶりにくつろいで歓談し飲み且つたべた。

浜田部長挨拶，「年々日大を卒業し，社会に出て行き，それぞれの職場で活躍している。これからも，力をあわせて頑張ってもらいたい。今夜はゆっくりと味わって，明日からの活力をつけてもらいたい……。」

参加者一同の自己紹介，在学中の想い出等の口上を述べあう。皆さんいちょうに楽しそうであった。

この様な会合は，5年程前から，インターハイ，国体のときに開催しているので，会員の皆さんは，是非ともお集り願いたいものである。地方にあって，自分の道を開拓している方々は特に，いろいろな話題をもちよって胸きんを開いて話し合うことがいかに大切なことか，世話人の川部君の労を謝しながら，これからのこの会の発展を祈るしだいである。

1970. 11. 8

第24回 全日本インカレ成績

県営愛知体育館
45. 8. 16～19

〔男子〕

団体総合	4位		533.10
種目別			
床	4位	五十嵐②	18.475
	6位	山崎①	18.450
鞍馬	4位	椎名③	17.975
吊輪	5位	島崎④	18.150
跳馬	1位	椎名③	18.525
鉄棒	4位	中谷③	18.175

〔女子〕

			規	自
団体総合	2位	357.80	(178.20	179.60)
個人総合				
4位	稲谷清子	73.45	(36.55	36.90)
7位	小宮由美子	72.65	(36.10	36.55)
11位	並木松子	70.75	(34.95	35.80)
12位	河内余志子	70.25	(35.45	34.80)
20位	宮川早苗	69.10	(34.90	34.20)
	宮川聖子	67.65	(33.30	34.20)
	瀬上冷子	66.80	(33.65	33.15)
	鈴木敏子	66.50	(32.70	33.80)
種目別				
跳馬	6位	小宮由美子		
平行棒	4位	小宮由美子		
平均台	5位	小宮由美子		

※稲谷は，ユニバー出発のため種目別棄権。

インカレを振り返って

海　谷　美代子（41年卒）

いつもは，インカレだけでなく，その他の試合でも，たゞ審判員としての責務を果す程度の気持しかなくて試合に臨んだものでした。

ですから，いつも二位というのが，そんなにくやしいとも感じないで，うちの選手だってベストを尽くしての結果なのだから仕方がないのではないか位の気持しか残らないものでした。そして，一位との差が15点にも及ぶと聞いても，まるでひとごとのようでした。

それが今回は，木村コーチが出産のため練習をみることができないとあって，急拠ピンチヒッターとして，合宿所に寝とまりして，

練習面，生活面と，ベッタリのつき合いをして試合に臨んだわけです。

1日余裕をみて出発したので，一晩は皆んなと一緒で東京での続きとして，何んの変化もなく過ぎたのですが，さて本部の宿舎に移ってからというもの，どうしても落ち着かないのです。

名古屋という所は，大変むし暑いので，皆んな，アイスクリームなど食べ過ぎてはいないだろうか。電話で注意しょうかしら。でも，もう子供ではないのだから，そこまでいったら嫌われやしないかしら……。

いざ試合が始まったら，今度は点数の出具合が気になって仕方がないのです。

私は平均台を担当していましたが，この種目は，日体大系が2人に，教育大系2人の編成なので，きっと上と下からけん制されて，苦しくなるぞと，覚悟はしていたものゝ，それがあまりにはっきりとあらわれてくるので，何度も集まって調整しなければならないはめになってしまいました。（こういう時ほど，もう審判はいやだと思うものです。）以前ならば，これほど説明しても理解してもらえなければ，これ以上話しても時間の労費でしかありませんので，別の機会にしましょうと，引き分けたものですが，今回はそういきません。何んとしても私の点数に近ずけてもらわなければの一心です。訂正のペンが動くまで帰しはしません。こんな風に書くと，私がゲタやアシダを履かせるのに苦労しているように思うでしょうが，そうではないのです。

今までですと，練習をみていないので，どれだけ励んできたかということが実感としてこないために，少しけん制されると，誰もが文句を言えないような演技をしなければ，多勢に無勢で仕方がないのだというあきらめの気持が先に立ってしまいました。

でも今回のように，選手と生活を共にしてみて，それではすまないのだという気がしたのです。選手はこの日のために，いろいろなことを我慢しながら練習に励んで，けがを押してなおもベストを尽くしているのだと思うと，いゝかげんな点数を認めるわけにはいかなくなったのです。いつもより緊張度の高い試合経験をしました。

私個人の気持の反省が先になり，肝心の選手のことが後になってしまいましたが，簡単にふれたいと思います。

成績については，別表を参照して載くとして，こゝでは，それらの点数を得るまでを，あくまで主観的な立場から書いてみます。

結果的にいって，みんなよくやったと思います。試合前から心配されていた稲ちゃんのけがや，多美が出られないということで，三位を覚悟で試合に臨まなければとまで思ったものでした。それがかえってチームワークを強める結果となったのでしょうか。何んとしても負けられないのだという気迫のようなものが感じられました。

平均台においては，規定の日など，余りに平然として演技を行なうので，こちらにふるえがくるほどでした。点数の上でも，一番良

かったはずですが，前にも書いたように，審判員みんなが公平な人達であったら，もっと良い成績になったはずです。
このような反省を，選手の目にも止まる誌上で書くべきではないかもしれません。
われわれ審判員同志が反省して，公平な立場を自覚するように努力すればすむことなのですが，出身大学の代表として行動する限り，大なり小なりのひいき点は，百パーセント感情から追い出すことは不可能だと思います。そうなると，数多くの審判員を出している大学が有利になるのは当然でしょう。

そこで，けん制してくるということは，敵は恐れている証拠でもあるので，こゝでもう一歩の努力と成長とを期待したいものです。

1970. 8

第24回全日本選手権
兼ミュンヘン・オリンピック強化選手選抜競技会成績

神戸市立中央体育館　45. 11. 20 ～ 23

〔男子〕

団体総合	4位	日本大学	530.375
	5位	日大桜樹クラブ	530.275
個人総合	6位	早田卓次	112.35
	16〃	椎名　昇	107.875
	22〃	高橋正典	106.725
	23〃	中谷秀明	105.90
	30〃	山崎忠男	104.825
	31〃	五十嵐健夫	104.80
	36〃	島崎康行	104.50
種目別	平行棒	3位	早田
	鞍　馬	4〃	〃
	吊　輪	4〃	〃
	鉄　棒	5〃	〃

〔女子〕

団体総合	2位	日本大学	355.45
個人総合	9位	稲谷清子	72.15
	12〃	小宮由美子	71.90
	14〃	長岡久美子	71.40
	20〃	宮川早苗	70.70
	22〃	斉藤多美子	70.25
	27〃	河内余志子	69.60
	33〃	宮川聖子	68.85
種目別	跳　馬	6位	稲谷
	平行棒	5〃	長岡

全日本選手権報告

11月20日より，神戸市立中央体育館において，第24回，全日本選手権が開かれました。わが桜樹会としては，先の会員総会の決定方針に添い，桜樹クラブとして，この大会に，初めて選手を送りました。

試合参加までには，競技部が中心となり，

数回にわたる合同練習を実施し，努力を重ねてきました。ポイントゲッターである大原君の故障が惜しまれましたが，早田君はじめ，ユニバー代表の原君等，堅実なメンバーを揃え，上位入賞を目指したのです。
結果は皆様ご承知の通り，上位入賞は成りませんでしたが，（詳細は別表参照）ＯＢの参加は，現役諸君を発奮させ，先輩に負けるなを合言葉にして，見事インカレでの劣勢をはね返したのは立派でした。

新生桜樹クラブの全日本出場は，会員諸兄の長年の念願でした。結果的には満足すべきものではありませんでしたが，大原君の欠場や，原君の床，跳馬の棄権，全体的な練習不足等のハンディキャップを，すばらしいチームワークで補っての活躍は，みごと初陣を飾ったと言うべきでしょう。

会場では，稲橋会長が陣頭指揮に立ち，チームは，チームリーダ朝倉君を中心によくまとまり，全体のマネージメントは鶴見君がひきうけるという，そのチームワークは実にみごとでした。

また，本会関係の審判員も，床・門脇，金子（洋），小柴，鞍馬・菊地，つり輪・遠藤，鉄棒・小栗，の諸氏を数え，近来にないにぎわいでした。

自由演技終了の夜は，恒例の懇親会が，宿舎である桔梗家で開かれ，桜樹クラブ，現役男女の選手諸君，そして応援のため駆けつけられた浜田部長はじめ，多数の先輩諸氏，その数５０余名という盛況ぶりでした。
現役も含めて，全国制覇への道は厳しいと思われますが，桜樹クラブの誕生を機に，日大勢が，日本体操界に新風を吹き込んでほしいものです。

ところで，桜樹クラブの全日本参加を，一発の打上花火に終らせないためには，会員諸氏の協力がぜひとも必要なのです。

選手は全額個人負担で試合に参加しました。揃いのユニホームは鶴見君の骨折りで，長期年賦にして載きました。桜樹会には，援助する財源が全くないのです。会費を４５年度まで完納している会員は１６７名の会員中，僅か２９名に過ぎません。

安サラリーの若き仲間が，桜樹会の名のもとに努力しているのです。せめて旅費の一部でも援助したいと思うのですが……。

会員諸氏へのお願いを付記して報告を終ります。　　1970. 11　　菊　地

訃　　報

昨年，９月２８日，第４回卒業の高島健治君が死去いたしました。胃癌でした。
彼の特技であった軽妙なイタリア語や，スペイン語を，なつかしく思い出される方も多いことと思います。
彼は，昭和３８年度の学連幹事長として，学生体操界の発展のため尽力されました。
卒業後は，一時高島スポーツを経営，最近は，喫茶店や食堂等の経営コンサルタントとして，業界紙に執筆しておりました。
29日の通夜，30日の告別式には，門脇，遠藤両先生はじめ，同期生，先輩，後輩が駆けつけ，彼の生前を忍び，冥福を祈りました。
あとに残された，生後９ケ月のお子さんを抱えた奥さんの姿が哀れでした。

第4回ハゼ釣り大会報告

9月13日午前8時30分，快晴に恵まれた東京湾に向けて，浅草橋あみ亀の船付場より出漁。乗り組んだのは，遠藤，稲橋，堀田，吉川，平川，早田，菊地，小栗，磯部，鶴見，朝倉，津村，山本，小野（会員外特別参加）以上14名。

航程1時間ほどで第一の漁場。先を争って竿をおろすがあたりなし。空の青さと対象的に真黒に濁った海面がいまいましい。あきらめて第二の漁場を目指す。その頃より，はじめようの声あり，ビールにて乾杯。船内にわかに活気ずく。しかし魚信の方は一向に届かず。二回，三回と船の移動が続くうちアルコールのストックが気になりはじめる。ついに10時30分，船頭に声が掛かり投錨。

東京湾の水も，ここまで来ると青さを増し，ヘドロ特有の臭いもなし。揚げたてのハゼの天ぷら（もちろん船宿が用意したネタ）のうまさ，酒のうまさに酔う。さんさんとふりそゝぐ大陽の下，波にゆだねられた船上から自慢の声が海面を渡る……。ストックが切れて午後の部が始まる。

江戸前のハゼを守る会々長の肩書をもつ超ベテラン船頭，中村亀太郎氏大いにあせるが魚影さらに無し。

午後3時，全員オデコのまゝ陸に上がる。

こうして今回のハゼ釣り行は終ったのですが，釣果はどうであろうと，楽しいひとゝきを過すことができました。次回もまたこりずに企画します。新人の参加を期待する次第です。　　1970. 10.

第7回忘年会報告

時　　45. 12/5 ～ 6
所　　館山市洲の崎ホテル
参加者　稲橋，堀田(淳)，吉川，芳尾，早田，菊地，小栗，鶴見，小柴，岩田，朝倉，今村，箱根，津村，高波，大原，山本，原，高橋

洲の崎ホテルにて迎える年忘れの会は，今年で5年目である。（第1,2回は東京）

12月5日(土)，16時59分両国発，途中千葉から乗車の3名を加えて，総勢19名が初冬の内房を館山に向った。会場である洲の崎ホテルは，館山からフラワーラインを経て車で20分，洲崎燈台のすぐ下にある。もうすっかり馴染になった宿の人達の歓迎をうけ，7時40分ホテル到着。

入浴の後，いよいよ宴会が始まる。稲橋会

長の乾杯の音頭で幕があき，見事なはまちの生作を肴に，飲み且つ歌い，踊るといった例年通りの風景が展開した。

今回の話題の中心は，なんといっても，桜樹クラブの全日本初出場のことであった。出場選手の労をねぎらう乾杯が幾度かくり返され，反省とともに，来年への決意を誓い合ったのである。

また，今回の参加者のうち，5年連続参加の稲橋，菊地，鶴見が出色ならば，わざわざ神戸から飛行機で駆けつけた初参加の小柴も異色であった。

久しぶりに会う昔の仲間はすばらしい。先輩も後輩もなく，一社会人として楽しく語り合う。そこには職場にありがちな，上司への気兼や，同僚への気遣もいらない。体操という絆で結ばれた人間関係がある。

稲橋会長と，豊山高校小栗先生のカップルが踊るワルツを想像して戴きたい。

夜が更けるのも忘れ歓談は続いたのである。来年もまた，洲の崎に出かけるだろう。12月の第1土曜日，日曜日をぜひ記憶に止めておいてほしいものである。

1970. 12.　K

第一回桜樹スキースクール報告

スキーではベテランの，小栗（39年卒），朝倉（43年卒）の両君が中心となって，桜樹スキースクールが企画されました。初めての試みにもかゝわらず，15名の参加者があり，有意義な講習会をもつことができました。

以下はその報告です。（文中，敬称は略させて載きました。）

時　昭和46年1月3日～5日
所　志賀高原（西発哺温泉ホテル泊）
参加者　早田，高田，菊地，小栗，鶴見，船木，朝倉，今村，佐久間，箱根，関口(始)，山本，原，工藤(昌)，伊原

1月3日，零時20分上野発，ガラガラの車中でゆっくり手足を伸ばして長野に向う。途中，高崎から高田が合流。5時16分長野着。長野電鉄にて湯田中へ。湯田中からは，長野中央高校に勤める船木が合流して，バスで発哺温泉へ。そこから15分位歩いて，7時30分頃宿舎である西発哺温泉ホテル到着。

朝食をすませて第一日目が始まる。

リフトで高天原のゲレンデに出る。快晴，遠く日本アルプスまで，すばらしい展望が広がる。

まず，全員で準備運動。初心者クラスの，早田，菊地，関口，山本は朝倉が，他の上級者クラスは小栗が指導に当る。相方とも容赦なくシボられる。

ひとしきり滑って昼食。

午後は，志賀高原に詳しい小栗の先導で数多

くのゲレンデを廻る。小栗，朝倉，高田ら，上級者のストックワークが冴える。初心者はゲレンデの片隅で基礎練習に励げむ。

夕闇せまるころ，林間コースを通って宿舎に降りる。初心者は雪にまみれて奮斗する。

7時間近く滑って，クタクタになったからだに，ビールの冷たさが心地よい。コタツを囲んで，今日の出来具合や，現役時代の話に花が咲く。

第2日，快晴。30分ほど歩いてブナ平のゲレンデに出る。午前の部が始まる。

初心者を除いた10名が，一線となって滑り降りる様は，他のスキー客もしばし見とれるほどである。二，三度デモンストレーションをくり返した後，有名な難所，ジャイアント・コースに挑む。（その間の描写ができないのは残念である。初心者は，ブナ平にて，与えられた課題を黙々と繰り返していたのだから。）

11時，約束のモミの木の下に全員集合，昼食。

午後は全員揃って，それぞれの実力に応じて技術練習。叱咤激励の声がとび，アドバイスが与えられる。休もうとしない女性群の気迫に押されて，練習がくり返される。佐久間の華麗なスキーが光る。初心者，山本，関口の進境もめざましい。

2時30分風邪気味の早田が一足早く宿舎に戻る。3時30分，全員事故のないよう，余力を残してゲレンデを後にする。各々，今日一日の充足感を味う。

夕食の後のだんらんがまた楽しい。スキーのこと，体操のこと，友人の消息など話はつきない。

午後8時，仕事の都合で，高田が山を降りる。

第3日，すごい吹雪である。新雪が30センチも積っている。扁桃腺をはらして寝こんでしまった早田と，バテ気味の菊地が残り，他の12名，元気よく吹雪の中にとび出す。

午後1時，新雪を十分堪能して全員無事帰着。

3時，もう一日滑りこもうと張り切る，若手の工藤，原，山本，箱根の4人を残して帰途につく。上野到着5日22時40分。

初めての桜樹会スキースクールの様子を誌上再録してみました。概略はご理解載けたことゝ思います。

この集いは，正月の恒例行事として，毎年続けていくことになりました。会員の中には，教職に携わる人が多いことから，スキー技術を身につけたいと願う人も沢山いることでしょう。初心者から上級者まで，その力に応じて，存分に楽しめると思います。

また，このスキースクールの良さは，スキー技術の修得ということばかりではなく，桜樹会々員という和を通して，深い人間関係を育成するという点にもあると思います。次回には，より多くの会員が，揃いのヤッケでみごとなシュプールを描くことでしょう。

1971. 1. 9　K

会費領収について

総　務

第２号に引き続き，４５年７月１１日以降，４６年１月１０日現在までに会費を納入された方々です。領収証は会報に同封いたします。

現金にて

45. 8. 12	伊原　脩	1,000
〃	井上　博	1,000
15	吉川　輝	3,000
9. 5	福田竹子	1,000
15	仲西盛光	3,500
10. 17	菊地君男	2500
25	朝倉徳雄	1,000
11. 23	松岡多賀子	2,500
12. 8	朝倉徳雄	500
25	髙田信興	3,000
46. 1. 9	坂田安世	4,000

口座にて

45. 8. 11	浅田泰男	3,000
24	野崎建史	1,000
10. 5	山田隆士	1,000
7	川口　潔	1,000
26	桑島洋子	1,000

(但し，手数料本会負担)

お知らせ

会則第１１条により，昭和４５年度会員総会を，４６年３月２１日（日）に開催いたします。

場所は日本体育協会（代々木）を予定しておりますが，なお決定次第ご連絡いたします。

年ごとに総会への参加者が増加しておりますが，より多くの会員の参加が，本会の一層の発展につながると思います。特に地方におられる会員の方々は参加が困難かと思いますが，年に一度の集いに，ぜひおでかけ下さいますようお願い申し上げます。

結　婚

		(年月)
安藤泰行	(44年卒)	45. 4
横山邦子 (旧姓 三橋)	(43年卒)	45. 5
木村美知子 (旧姓 小栗)	(〃)	45. 9
砂野泰男	(41年卒)	45. 11
高波司雄	(44年卒)	45. 11
山田隆士 〃 寿美子 (旧姓 中村)	(45年卒)	45. 11
大内清	(42年卒)	45. 12
佐藤健一	(43年卒)	46. 1
小栗郁郎	(39年卒)	46. 1

誕　生

磯部忠通	45. 2	男
早乙女貞夫	45.	?
木村多喜	45. 8	女
船木政明	45. 9	女
菊地君男	45. 10	男
平川文雄	45. 11	男

編　集　後　記

いつものことながら，予定は決定にあらず，あくまで未定であったようである。前号の編集後記にも，予定よりおくれてしまったことへのお詫びの文を書いたが，今回もまた同様の文章を書かざるを得ないのは残念である。とにかく，どうにか第3号の原稿をまとめることができてホッとしたところである。

編集といっても，まだまだ素人仕事で，機関誌としての体裁も整っていないが，今後とも継続させていくことに努力したい。

それにしても，会員間に会報に対する認識が得られないのか，一般寄稿がないのはさみしいことである。北海道から九州，沖縄に至る会員からの便りが，誌上をにぎわすようになってほしいものである。

今回，巻頭を浜田先生の文章で飾ることができたのは幸いであった。

46. 1. 15